戊戌變法をめぐる政治的諸情勢について

北山康夫

序

戊戌の變法運動は洋務派が日清戰爭で敗れたこと、そして戰後帝國主義列強の露骨なる侵略が行われたことに對し開明的な官僚や紳士が光緒帝を中心として改良主義的な政治改革を企圖した畫期的な事件であった。それは中國の知識階級が滅亡の危機に頻して立ち上った最初の自覺せる民族運動である。

然し從來この運動の思想的背景については色々の研究がなされているが、變法運動そのものについては充分な究明がなされていない。彼らの企圖した改革の本質は何であったか。その社會的基盤は何であったか。そして當時の中國に於ては當然かくの如き改革がなさるべきであったのに、それが失敗に終ったのは何故か。このようなことについては漠然としたことしか明らかにされていないのが實情である。

中國の歷史を停滯性に於てとらえんとする戰前の立場からは、矢野博士の如く、康有爲などは國家の危機に際し何でも改革しなければならないという氣持がなかったので、當然失敗する運命にあったとされ(矢野博士・清朝末史研究)、又出石誠彥氏の如く問題を西太后と光緒帝の感情的對立に解消される(出石氏・東洋近世史研究)。又戰後に於ける新らしい立場からする研究に於ても、それが皇帝を中心とする上からの改革であり、人民との結びつきがなかったので、成功しなかったとし、民主運動の先驅としての歷史的意義を認めつつも、單にその後に於ける革命運動の前提としてとらえ、變法運動そのものについての究明は充分でない。[1)]

中國では近年戊戌變法に關する史料が次々に出版されている。中國史學會編「戊戌變法」、梁啓超の戊戌政變記、譚嗣同全集などである。特に戊戌政變記は中國第一のジャー

ナリストといわれる梁啓超が自らの體驗を通じて記述したもので、極めて興味深く、又貴重な史料である。私は以上の史料を中心として、戊戌變法の具體的內容と、それをめぐって展開された保守派と變法派の鬪爭について述べて見たいと思う。

(一)

さて變法運動が高まって來たのはいうまでもなく日清戰爭後のことであって、一八九五年四月、康有爲が科擧のため北京に集っていた一千三百餘人の人々と共に講和に反對して有名な公車上書を行ったのがその發端であった。そして八月強學會を組織し、中外紀聞・時務報などを發刊して後組織的運動へと發展した。梁啓超もこのことについて

時に京師には新聞を出す者はなく、中國の讀書人で會をつくる者もなかった。これをなしたのは皆康有爲がはじめである。(戊戌政變記)

とその歷史的意義を高く評價している。強學會の活動は極めて穩健なもので、單に演說會を催し、新聞を發行し、西洋の書物を飜譯するのが目的で啓蒙運動にすぎなかったのであるが、保守派の忌諱にふれ、成立後僅か四ヶ月で、この年の十一月には解散を命ぜられた。

日清戰爭の敗北は安眠を貪る中國人に甚大なるショックを與えたが、それにも增して中國人を驚ろかしたのは三國干涉後に於ける列強の露骨なる侵略であった。康有爲が保國會で行った講演によると、一八九八年の二月に至る四十日間に、中國は實に二十餘件の利權を列強から要求されている。[2] そしてドイツの膠州灣占領に對抗して露國が旅順・大連の租借を要求したのがこの年の二月のことであった。今や列強は都の近く華北の地に港を建設し、鐵道を敷設するに至ったのである。特に保守派の西太后や李鴻章がたのみとしていた帝政ロシヤがドイツの侵略に際して中國を援助するどころか、却ってこれを口實として侵略を逞うしたことは、變法派の進出に絕好のチャンスを與えた。

このようにして湖南に南學會、廣東に粵學會、四川に蜀學會、福建に閩學會、陝西に陝學會など各地に政黨の萌芽ともいうべき學會が生れて來たが、遂に三月二十七日、北京に保國會が組織された。保國會は勿論康有爲の指導するところであるが、その趣旨・目的は、國家・國民・國教を保全することで、列強の侵略に對して自主的に中國を防衛

することであった。それは強學會に比べて政治的色彩が一層濃厚であり、その會の組織も總理が選擧され、議決が多數決によるなど民主的である。都の北京でこのような政治結社が生れたことは保守派の人々を驚ろかした。保守派と變法派の對立はこの會の成立後激化して來るのである。そして保國會こそが變法運動の推進力となり母體となる。

日清戰爭後の中國は大清帝國の面影はなく、中國の土地でありながら、役人を任命するにも、外國から金を借りるにも列國の許可を得なければならず、その軍隊も帝政ロシヤから派遣された將校の訓練を受けねばならず、全く國あって國なき有樣であった。旅順・大連・青島などに列國の根據地ができ、そこから奥地へと鐵道が敷設され、外國資本が進出した。清朝政府はこれらの列強と結びつき、そのいうがまゝに操られている。このような中國の現實に抗して中國の土地と主權を守らんとするのが各地に結成された學會であり[3]、その中心をなすのが保國會であった。保國會が大清帝國を守るのでなく、中國人のためのものであると非難されたのも、一面の眞理を含んでいたのである。

(二)

それでは變法運動は何を企圖していたであろうか。梁啓超は洋務運動と變法運動とを比較して

凡そ改革の事は舊きものを除くことゝ、新らしいものを實施することゝ兩者の努力が相等しくして始めて効果があがるのである。苟しくも舊いものを除くことを努めずして新しいことを實施しても、その勢必ず舊政の積弊が新政の中に入り、新政は反ってその害を增すだけである

(梁・戊戌政變記)。

と述べ、洋務運動では舊いものはそのまゝにしておいて、新らしいものを補ったゞけであったからその効果があがらなかったことを指摘する。從って變法運動は洋務運動の如く彌縫の策を講ずるのでなく、國家の根本となる政治制度を變革するのであり、

事を變えて法を變えず、法を變えて人を變えなかったならば、變えないのと同じである。

というのである[4]。その具體的な內容は一八九八年の正月に康有爲の奉った統籌全局の奏議に明らかである。それによると制度局を內廷に設け、天下の通才十數人を選んでこれに當て、皇帝を中心として政治改革の企畫をなすのである。

それと同時に中央に法律局・度支局・學校局・農局・工局・商局等の十二局を設置して新政を實施し、地方にも各省に民政分局を設けて新政實施の推進力にしようというのである。

この頃の清朝では、天子の諮問機關としては總理衙門の總署と軍機處があった。然し兩者共に保守頑迷な老人のみで光緒帝の相談相手になり得るものは殆んどいなかった。そこで制度局を設けて變法派の者を招いて改革の實施案を練ろうというのである。又六部に代って十二局を設置するのであって、これは根本的な變革である。

この上書があって後康有爲が光緒帝に面接したとき、帝は「舊い機關が役に立たないことはわかっているが、それを廢止することは仲々むつかしいことである。それをどうすればよいか」と問うたのに對し、彼は「舊い機關を廢止する必要はない。只新らしいのを設ければよい。舊大臣をやめさせる必要はない。小臣を拔擢すればよい。彼の舊大臣は何も仕事をしていないのであるから、仕事は小臣に任しても何も文句はなかろう。日本で大名を廢して華族にしたように取扱えばよい」と答えている。彼は六部まで廢止する決意はなかったが、新らしい人材を登庸し、新らしい機關を設置することによって政治の實權を變法派で握ろうとしていたのである。

制度局の設置は保守派と變法派の鬪爭の焦點となった。この案を總署に諮ったが五月に至っても尙覆奏しない。光緒帝は激怒して卽覆せしめたが全面的な拒否にあった。帝は張蔭桓をよんで叱責し、お前たちは康の意見の一つでも實行する意志がないのかと迫ったので、張はこのことは重大であるから數人で決定することはできない。軍機處にも諮って決定したいと答えたので、五月十七日軍機大臣と總署で審議させたが、二十五日になってその實施に反對するとの回答があった。帝は益々怒って硃筆を以て兩衙門に再審議させたが、矢張り枝葉末節については贊成したが、根本的なことには反對であった。光緒帝も如何ともすることができなかった。七月二十日楊銳・劉光第・林旭・譚嗣同を軍機大臣章京として天子の政治顧問としたのは制度局の案が通らなかったからである。そして政變後これらの四人の者が何れも死刑に處せられていることから見ても、制度局が改革の中樞であったことが明らかである。それは政權

の奪取を意味していたのである。

制度局の設置が否認されることによって新政は壁にぶち當ってしまった。それは保守派の西太后一派が軍機處や總理衙門の背後で暗躍していたからであるが、又これらの衙門によっている連中が頑迷固陋であり、眼中自己の利益しかなかったからである。ドイツが青島を占領したとき、ある人が張之洞に「列國が中國を分割しようとしているが、あなたはどうするつもりか」と聞いた。これに對し張は「分割されたにしても小朝廷は殘るであろう。自分はその小朝廷の大臣になることができる」と答えて涼しい顔をしていた。張之洞は大官の中でものゝわかった人である。その人にしてかゝる有様であると言って梁啓超が慨嘆している。[5] 梁啓超は當時の大官を三つのグループに分けている。その第一は世界のことを全然知らず、外國の名前を言っても信用せず、危急を說いてもそれは漢奸の爲にする言だとしてとり合わない連中である。第二の連中は、外患の恐るべきことは知っているが、自分は七、八十の老人であるから餘命いくばくもない。あとはどうなってもよいと考えている。第三は、國が亡んで小朝廷になっても、自分は大臣になることができる。然し今若し新政が實施されると自分には實力がないから直ちに退けられる。そこで極力反對する連中である。梁は光緒帝をとりまく大官連中の心理を鋭く分析している。かくの如き有様では新政が行き詰ってしまったのも不思議なことでない。

新政の實施に於て最も障碍にぶち當り、攻擊の的となったのは、制度局の設置と科擧に於ける八股文の廢止であった。八股の廢止は數百の翰林、數千の進士、數萬の擧人、數十萬の秀才、數百萬の童生の運命にかゝる問題であり、制度局、十二局の設置は六部九卿の運命にかゝる問題であったからである。宮廷の中で醉生夢死していた數千の人々はゴウ〳〵たる非難の聲をあげ、泣いて西太后に嘆願する有様であった。これに對し光緒帝を中心とする變法派の力は餘りにも弱かった。

それでも四月から八月に至る間、新政の詔は雨の如く下った。然し地方に於ける實施の狀況は、

四月以來詔はしきりに下り、新政を擧行し、督撫に實施を促したが、湖南の巡撫陳寶箴を除いては、詔書を實施する者は少なかった。帝は三令五申して諄論したけれど

も効果はなかった。……帝が激怒して何回も嚴しく責めたけれども、終に一人も罷免することができず、一人も懲らしめることができなかった。督撫は西太后の任用するところであり、帝には人事權がなかった。それで督撫は詔令を無視し、維新の令を實行しなかったのである（戊戌政變記）。

とある如くであった。學會が有力で、地方議會の役割を果す位紳士が力をもっていた湖南を除いて新政は殆んど實施されなかったのである。

(三)

新政の實施は行きつまった。出される詔令も一向に實施されなかった。それは保守派の連中が西太后を中心として結束して阻止していたからである。西太后の背後には軍事の實權を握っている滿洲人の榮祿があった。四月二十三日新政實施の詔が出てから間もなく、變法派の翁同龢が免職になり、榮祿が直隷總督となったのは、新政に對するクーデターを行うための布石であった。從って督撫も新政の實施に熱意を示さなかったのである。

榮祿の下には武毅軍を率いる聶士成、新建軍の袁世凱、甘肅の土軍を率いる董福祥があった。その總數は四、五萬であった。これらの中で新政に理解のあったのは袁世凱であり、彼の下には洋式訓練を受け、精鋭を誇る新軍があった。新政をこれ以上推し進めるためにはどうしても軍事の實權を握ることが必要であるが、變法派が期待をかけたのは袁世凱であった。七月二十九日、袁世凱は入京を命ぜられ、八月一日謁見が行われ、侍郎に昇格した。ところが八月三日榮祿から電報があり、英露の間に戰爭が起り、各國の軍艦が塘沽に集結しているから至急袁世凱が天津に歸ってほしいということであった。そこで四日袁が出京の許可を受けに行ったが、光緒帝は五日に出京することを許し、五日の日にも謁見が行われている。そして六日の日に政變が起ったのである。袁世凱を北京から天津に招いたのは明らかに榮祿らの謀略であった。譚嗣同が袁世凱を訪ねて息づまるような談判の行われたのは三日の夜のことであった。當時の緊迫した政治情勢が想像に難くない。結局變法派が企圖していたクーデターは、袁の裏切りにより失敗に歸するのであるが、變法派の政治工作は保守派の心臓部まで迫ったのである。

西太后を中心とする保守派は政治の實權を握っていたので十分自信をもっていた。戊戌政變記によると、或る人が榮祿に「光緒帝が無茶な政治を行い、祖宗の制度を破壞している。これをどうするつもりか」と聞いたのに對し、榮祿は、「しばらくしたいようにさせるがよい」と答えたと言う。彼らはしばらく新政を實施せしめ、機の熟するを待って一擧に彈壓しようとしていたのである。

然し私達は變法派の力を餘りにも過少評價してはならない。嚴復は當時の變法派を論じて、

そのうちの一つは、新法を談じて時勢の粧となす新しがり屋である。彼等はことごとに附和するけれども、その本心から出たのでない。第二は西洋人の船堅砲利を見てこれに學ばねばならぬとする人達である。その第三は極めて保守的な人間であるが、何事も知らないことはないという顏がして見たい連中である。これらの連中は維新派の粧をしているが、實は維新の心はないのである。

（戊戌變法所收嚴復・論中國分黨）

と云っている。變法派には時代に迎合する者が多く、斷乎として新政を實施する決意をもつ者が少なかったことは事實である。變法派の如く粧って、いざ時勢が不利になると裏切って保守派に通ずる李盛繹・張之洞・袁世凱の如き人物もあった。然し當時の心ある人々がひそかに變法に期待し、これを支持していたことを忘れてはならぬ。朱德は四川の奥地にも變法に期待をかけた學校教師のあったことを物語っている（スメドレー・偉大なる道）。日清戰爭に敗れ、分割の危機に頻した祖國を憂うる人々は光緒帝に希望を托していたのである。宮廷の奥深く生活する光緒帝を動かしたのもこの時代の動きである。譚嗣同の如き當時としては極めて急進的な青年を天子の顧問にまでつき上げたのは、當時の緊迫した空氣であった。[6] 梁啓超は三十年來教案の起らなかった年はないが、新政が實施された三ヶ月間には一件の教案も起らなかった。然るに政變の第四日目に北京で暴徒が蜂起し、その後の二ヶ月間に宣教師の殺害事件が五、六件も起ったと述べている。このことは或る程度人心の動向を物語っている。帝國主義の侵略に對する怒りは教案として爆發した。新政實施の期間中に教案が起らなかったのは、民衆が私かに新政に期待していたからではないか。政變後二ヶ年にして華北に教案の大規模なものとして義和團

事件の爆發したこともこの間の消息を物語っている。民衆の中には清朝の軟弱なる政策と帝國主義の侵略に對する憤激が充滿していた。そして新政の實施と共に中國人の眼が開かれたのである。魯迅が紹興を出て南京にあった江南水師學堂に學んだのもこの年のことであった。然しそれが政治運動として正しく組織されなかったのが變法派の弱點であった。[7]

新政は遂に中途で挫折した。それは當時として當然行わるべき變革であったにも拘らず失敗した。變法派と保守派の實力の相違はさりながら、私はこゝに西太后を中心とする滿洲人の民族的利己心を見のがすことができない。單行本の戊戌政變記には見えないが、史料集「戊戌變法」に引用する政變記には梁啓超の言として次のようなことが記されている。

數年前のこと、英國の公使が醇親王に「貴國の兵は甚だ恃むに足りない。方今外患が日に迫っているのにどうして早く何とかしないのか」と聞いたところが、醇親王は「我が國の兵は家賊に備えるためにあるのであって、外國に備えるためにあるのでない」と答えた。又大學士軍機大臣の剛毅は常に人に語って「改革は漢人に利があるが、滿洲人には害である。我々は產業(國家)をもつているが、寧ろこれを朋友である露國に與えても奴隷である漢人に與えない」と言っていた。この二つの話は京師の人の皆聞いているところである。私が此の書を讀む人に言いたいことは、滿洲人の保守派の人々の心事如何と言うならば、この二人の言葉が卽ちその代表であると。

以上が滿洲人の僞らざる心情であった。實力のない滿洲人は、新政が實施されると政治の實權を漢人に奪われることを恐れ、極力新政に反對したのである。その意味で彼等の反對は根強いものであった。新政がなさるべくして挫折したのは、清朝が異民族の王朝であったことが一つの原因であり、新政は一面に於て滿洲人と漢人との政治鬪爭であったのである。保國會が大清帝國を守るのでなく、中國人を守るためのものであるとして攻擊され、又光緒帝が漢奸として罵られたのはそのためである。滿洲人にとっては新政の實施は漢人の政權奪取として考えられた。

從って政變後に於てはその反動として滿洲人の漢人に對

する壓迫は強化される。知新報評論にこのことについて、次の如く述べている。

異なるかな日本人松崗氏の言。曰く。「政變以後滿洲人の政策は一變し、昔は外交に注意していたが、今や內治に注意するようになった。昔は漢人を信用していたが、今や嫉惡するようになった。漢人を嫉惡するのは漢人が役に立たないからでなく、漢人の才智を畏忌しているからである」と。（戊戌變法）

新政が滿洲人と漢人の民族鬪爭の性格を帶びたことが、新政の實施を一層困難にしたことを否定することができない。

(四)

次に私は變法を繞る當時の國際關係について述べて見たい。保守派の西太后や李鴻章が日清戰爭前から帝政ロシヤに依賴し、結びついていたことは周知の事實であるが、特に戰後に於てはその弱體化した政權を維持するため一層ロシヤに接近した。三國干涉や借款に帝政ロシヤの援助が著るしく、そして遂に一八九六年の露清密約として實を結んだ。李鴻章はこれによって二十年の平和を維持できるとして甚だ得意であった。兩者は世界に於ける代表的な君主獨裁國家として精神的にも相通ずるものがあった。その結合はロシヤの旅順・大連の占領によっても搖がず、政變後に於ては一層緊密の度を加へた。梁啓超はこの點について

蓋しロシヤと結ぶのはそれによって專制の君權を維持し、抑壓政策を實施せんがためである。自分は政變の後に於て益々この點に注意する必要があると思う。……又露人を招いて蒙古の騎馬隊八千人を訓練しようとしている。ああ、これこそは實にロシヤのコサックが東亞の地を踐蹈する先驅である。（戊戌變法所收戊戌政變記）

と論じている。

一方保守派と結んで北方から進出する帝政ロシヤに最も脅威を感じていたのは英國と日本であった。日本は日清戰爭に勝利したものゝ、朝鮮に進出する帝政ロシヤを恐れていた。ドイツが青島を占領した機會に參謀本部は神尾・宇都宮の二人を派遣して湖廣總督張之洞に日本と結ぶことを提案した。一八九八年の春、ロシヤが旅順・大連を占領すると神尾は漢口で譚嗣同に會っている。譚嗣同も日本との結合に贊成し、南學會の講演で

自分はこの頃湖北で日本政府が派遣した官員三人と話し

合ったが、彼らは「中國と日本とは脣齒相依る關係である。中國が存立することができなければ日本も亦滅びる。だから甚だ中國と戰ったことを悔いており、中國と結ばんことを希んでいる。中國を救うことは自らを救うことである」と語った。（譚嗣同全集・論中國情形危急）

と述べている。譚と並び稱せられる唐才常も

日本・中國・英國が結んだならば、強國ロシヤが如何にさかしくとも東方侵略をほしいまゝにすることができない。（戊戌變法所收唐・論中國宜與英日連盟）

といっている。日本で東亞同文會が組織されたのもこの頃である。變法派は日本の明治維新を理想としていたのであるから精神的にも相通ずるものがあった。

一方康有爲や梁啓超は英國とも結んでいた。英國人が中心となって上海で廣學會ができたのが一八八七年のことであるが、廣學會の指導者である英人李提摩太 Timothy Richard は光緒帝に政治改革の意見書を奉ったことがあり、梁啓超は彼の書記をしていたこともある。帝政ロシヤの進出を恐れる英國も亦變法派を支持し、これと結んでいた。

この意味に於て新政が進行していた七月廿六日に日本の前首相であり、日本憲法の作成者である伊藤博文が中國を訪れたのは大きな政治的意義があったと思われる。伊藤が天津から北京に到着したのは七月廿九日で、八月五日に光緒帝に謁見している。その翌日に政變が起った。伊藤の北京訪問はその時期を失しているが、當時の中國の新聞はこのことを大々的に報じている。伊藤も何か期するところがあったに違いない。變法派の背後には日本人や英國人が動いていた。康や梁が日本に無事亡命できたのも兩國の援助によるのである。

(五)

戊戌變法は八月六日の保守派のクーデターでもろくも潰え去った。彈壓は強化され、獲得した民主的諸權利も奪われた。然し民衆の政治的自覺は高められ、或る程度の出版・結社の自由を得たこと、官辨、官督商辨の經濟的束縛を破って民間資本主義工業の自由を得たこと、西洋の民主的文化が廣く普及したことなど、その歷史的意義は高く評價されねばならない。[8] 一般に言われているように、洋務運動に於ては單に西洋の武器を輸入したゞけで、封建專制に對す

る批判は何ら起らなかったが、變法運動は政治制度そのものに對する改革運動であった。それは日清戰爭に續く帝國主義國家の侵略によって起った民主的政治運動であり、ブルジョア民主革命に發展する可能性をもっていた。彼らが清朝の光緒帝の力を餘りにも高く評價したことは勿論誤りであるが、それは政治運動として一度は經過しなければならぬ過程である。

變法派は政變後も保皇派として活動を續ける。そして義和團の亂以後、漸く一般の支持を得て來た革命派と激しく鬪うのである。特に民報が出てから、保皇派の機關誌新民叢報との間で革命の問題について論爭が展開される。[9] 兩者の論戰の第一は滿洲朝に對する問題であった。保皇派は西太后に反對したが光緒帝を支持し、滿漢兩民族は同一國民であり、民族的對立はないとした。これに對し革命派は滿洲貴族の反動性を攻擊し、光緒帝による政治改革は不可能であり、保皇派の活動は亡びんとする清朝を擁護するに外ならないとした。

第二の問題は革命の方法に關するものである。保皇派は君主立憲を主張し、開明專制によって徐々に人民を啓蒙し然る後民主政治を實施せんとしたが、革命派は民主政治を實施するには革命が必要であり、清朝を倒すことが先決問題であるとした。

第三は土地問題である。革命派は平均地權、土地國有を主張したが、保皇派は土地解放は下層階級の騷動を起し、中國は滅亡するといって反對した。第四は革命と瓜分の問題である。革命は內亂を起し、列國の瓜分を招くという保皇派に對し、革命派は現在既に瓜分が行われており、革命を行うのは獨立するためであり、革命なくして瓜分を防ぐことはできないとした。[10]

兩者の論戰は極めて激しいものであった。保皇派は光緒帝を支持して平和的に立憲政治を實現せんとし、革命派は實力によって滿洲人の支配を打倒することが第一であるとし、又保皇派は下層民の蜂起を恐れたが、革命派は下層民をも動員して革命をなさんとした。日清戰爭後先進的思想として迎えられた變法運動も今や時代おくれとなった。中國人は變法論をのりこえて前進したのである。從ってこの論爭はやがて革命派の勝利となり、辛亥革命に向って前進するのである。それは變法論からの辯證法的發展である。

こゝに中國思想發展の論理を見ることができる。日本では明治維新以後このような發展を見ることができない。

最後に一言したいことは當時に於ける日本と中國との關係である。明治維新によって近代國家をまがりなりにも建設した日本が、絶えず中國侵略の野心をもっていたことは事實であるが、それにも時代と共に變動があり、實藤氏の言う如く、明治初年から日清戰爭までが攻日論流行時代、日清戰爭から明治の末までが親日時代、そして大正のはじめからが排日時代、と中國の側からの時代區分も一面の眞理を含んでいる（實藤惠秀・明治日支文化交渉）。そして鈴江言一氏が孫文傳の中で

支那市場に於ける日本の經濟的地位の確立は日本ブルジョアジーの運命にとって生死の問題であったに拘らず、四百三十萬哩四億人からなる此市場獲得戰に於て日本は他の競爭者――歐米諸國から被壓迫的な立場に置かれていた。海外市場獲得戰の基礎たる國家の武裝に於ても產業發達の高度に於ても日本は他の競爭者とは比較にならぬ劣勢にあった。隨って列國が原始的手段を以てする支那の領土や其他政治的經濟的利權獲得運動に於て、日本は同じ行動に於ける競爭の可能不可能よりも、列國の積極的支那侵略の發展を直接自己に加えられる危害として感ずる方が急であった。此の故に日本のブルジョアジーは歐米諸國の侵略を支那自身が拒否し得ることを切望した。此の切望に對し腐爛恢復の見込なき滿洲政府の存在は喜ばしいものでなかった。

と述べていることは味うべき言である。日本の國家・政府はともかくとして、日本人が中國が近代化され、獨立國となることを希望し、援助した善意を否定することはできない。少くともこの變法の前後に於てその意圖は何であれ、客觀的には日本が帝政ロシヤの侵略に對するため、又清朝と帝政ロシヤをきりはなすために、中國の進步勢力と手を握り、これを援助していたことは事實である。これは明治時代の日中交涉に於て忘れることのできない事實であり、近代に於て日本と中國の最も親密であったのはこの頃から日露戰爭にかけての時期である。[10]

中國の近代化運動は日本に比べて極めておくれて發足した。然し戊戌變法から辛亥革命へ、五四運動から國共合作へ、そして抗日民族統一戰線へと、絶えず運動は社會の下

部に滲透し、その重心を移し、遂に今日の新らしい中國を建設した。戊戌變法はその第一の段階として大きな歴史的意義をもっているのである。（昭和三十一年十一月六日稿了）

註

①范文瀾「中國近代史」、宋雲彬「康有爲」
華崗「中國民族解放運動史」
沈鏡如「戊戌變法與日本」（歴史研究一九五四ノ六）
等を參照。范文瀾の書は具体的な事實が豊富である。

②康有爲はこれについて次の如く述べている。
四十日之間。要挾逼迫者二十事。一德之强租膠州。人所共知也。其二則英欲借我款三釐息。而俄不許矣。其三欲開大連灣通商。俄不許矣。其四欲開南寧通商。俄不許矣。其五借英款不成。而內河全許駛行輪船矣。其六西貢燒敎堂。法索我償款十萬矣。其七姚協賛調補山東道。德人限二十四點鍾撤去矣。其八津鎭鐵路過山東。三電德廷。德不許矣。其九改道過河南。德亦不許。後請英美使言之乃許矣。其十聶軍請俄敎習。而訂明不歸統領節制矣。其十一俄敎習去留須候俄廷旨矣。其十二俄人勒逐德敎習四人矣。其十三直隸山西東三省練兵。必須請俄敎習矣。云云（戊戌政變記）

③當時變法運動の一つの中心をなしていたのは湖南であった。梁啓超はこれについて
蓋當時正德人侵奪膠州之時。列國分割中國之論大起。故湖南志士人人作亡後之圖。思保湖南之獨立。而獨立之擧。非可空言。必其人民習於政術、能有自治之實際然後可。故先爲此會以講習。以爲他日之基。且將因此而推諸於南部各省。則他日雖過分割。而南支那猶可以不亡。此會之所以名爲南學也。（戊戌政變記）
と述べている。南學會は巡撫陳寶箴按察使黃遵憲もその指導者であり、恰も地方議會の如きであった。

④梁啓超は洋務運動について
我中國自同治後所謂變法者。若練兵也。開鑛也。通商也。交涉之有總署使館也。敎育之有同文方言館及中國學堂也。皆疇昔之所謂改革者也。夫以練兵論。將帥不由學校而出。能知兵乎。選兵無度。任意招募。半屬流丐。体之羸壯所不知。識字與否所不計。能用命乎。……夫此諸事者。則三十年來名臣曾國藩・文祥・沈葆楨・李鴻章・張之洞之徒。所竭力而始成之者也。然其効若此。然則不變其本。不易其俗。不定其規模。不籌其全局。而依然若此之支支節節以變之。則雖使各省得許多督撫皆若李鴻章張之洞之才之識。又假以十年無事。聽之使若李鴻章張之洞所爲。則於中國之弱之亡能稍有救乎。吾知必不能也。（戊戌政變記）
と論じている。日清戰爭後洋務運動に對する批判が各方面から起っているが、梁の議論は最も核心をついている。尙このことについては、拙稿「中國に於ける官營軍事工業の一考察」（ヒストリア第九號）を參照されたい。

⑤變法派と保守派の中間に立ち、「中學爲體、洋學爲用」と唱えて變法に反對したのは張之洞である。彼の勸學篇は一八九八年に出版されているが、その中で
民權之說。無一益而有百害。若人皆自主。不盡滅人類不止。

と述べている。彼は西洋の技術の優れていることを認めていたが、政治の變革には絶對反對で、特に民權說は眞向から之を否定した。

⑥變法派の中で最も急進的であつたのは譚嗣同である。彼は太平天國を支持し、これを鎭壓した曾國藩を攻擊する。中國の封建道德である五倫に對する批判も最も鋭い。彼の弟子の中から黃興の如き人物が出たことから見ても、思想的に改革派から革命派への橋をかけた人である。その思想については楊正典の「譚嗣同」を參照されたい。

⑦康有爲は一八九八年の上書で當時の華北の險惡な空氣について

自台事後。天下皆知朝廷之不可恃。人無固志。奸宄生心。陳涉輟耕於隴上。石勒倚嘯於東門。所在而有。近邊尤衆。伏莽遍於山澤。敎民遍於腹背。

と述べている。恰も義和團の亂を豫見していたかの如くである。彼らの變法運動もかゝる事態に對處するものであった。

⑧變法運動は資本主義の發展に道を開くものであった。譚嗣同が湖南で近代產業を企畫していたことは、梁啓超の譚嗣同傳に

於是湖南倡辦之事。若內河小輪船也。商辦鑛務也。湘粵鐵路也。……皆君所倡論擘畫者也。

と言って居り、又日淸戰爭後の外國資本の進出に刺戟されて企業熱のあがったことについて、一八九七年に張之洞は

數年以來江浙湖北等省。陸續添設紡紗・繅糸・烘繭各廠約三十家。此外械造之貨。蘇滬江寧等處。有購機器製造洋酒・洋蠟・火柴(マッチ)・碾米・自來火者。江西亦有西法養蠶繅糸之請。陝西亦有集股開設機器紡織局。四川已購械創設煤油並議立洋燭公司。山西亦集股興辦煤鐵。開設商務公司。……自此各省氣象日新。必且愈推愈廣。(光緒政要)

と述べている。その盛んな有樣を知ることができる。變法運動は又かゝる社會的氣運に支えられていたのである。

又梁啓超は變法が與えた人心の變化について

八股既廢。數月以來。天下移風。數千萬之士人。皆不得不舍其兔園册子帖帖講章。爭購萬國之故及各種新學。爭閱地圖。爭講譯出之西書。昔之夢々然不知有大地。以中國爲世界獨立無二之國者。今則忽然開目。憬然知中國以外尙有如許多國。而頑陋倨傲之意見。可以頓釋矣。雖僅數月。八股旋復。而耳目既開。民智驟進。自有不甘於謬陋者。舊藩頓決。泉涌濤奔。非復如昔日之可以揜閉抑遏矣。(戊戌政變記)

と述べている。

⑨革命派を代表して論陣を張ったのが章炳麟である。その說は「駁康有爲論革命書」(中國近代史資料選輯所收)に詳しい。

⑩この點については拙稿「魯迅と留日學生の啓蒙革命運動」(中國研究一九五六・九號)で論じておいた。

Politics in the 1898 Reformation

Yasuo Kitayama

The 1898 reformation was the first of a series of democratic movements in modern China. It was a reform movement organized by the lower but progressive bureaucracy and the gentry, and it had as its program a reorganization of the Six Ministries of the Central Government and creation of local agencies for civil administration. It was more thoroughgoing than the so-called Yang-wu movement. The adherents of the movement helped Yuan Shih-k'ai seize military power in order to weaken the Manchu aristocracy with the Empress Dowager as their leader. However, the movement which was necessarily anti-Manchu, was crashed by the hand of the Manchu aristocracy which had nothing in mind than their own racial interest. Though it collapsed, the role of the movement was not small in the sense that the leaders of the movement found in it the necessity of becoming more "world-minded" and it gave a first blow to Manchu despotism. The failure of the 1898 movement led to the rise of revolutionary movement, finally resulting in the downfall of the Manchu dynasty.